

# みずほ Mizuho

題字 高校第十六回生の佐藤美佐子さん  
(旧姓田代)の筆になるものです。

## 私の読書人生

石田 敦子 (大学 特任教授)

今回、この原稿依頼のお話をいただき、改めて自分の読書人生を振り返ってみた。読書が好きでな方ではなかったが、本の中の空想の世界で、色々夢見ることが好きで、夢中になって読んでいた頃もあった。今でもよく覚えていたのは、中学生の頃、友達と『赤毛のアン』を読み合っていて、お互いに主人公のアンになりきり、登場人物に思いをはせていたことである。今でも、その頃のことを懐かしく思い出される。

その後も、自分から本を探して読むというよりは、友人から勧められたり、話題になっている本を読んだりすることが多かった。教師になつてからは、専門書その他、保護者から相談される機会があり、生き方や子育てなどの本を読むことが増えてきた。特に印象に残っている本を二冊紹介する。一冊目は、長谷部誠著の『心を整える』。二冊目はドロシー・ロー・ノルト著の『子どもが育つ魔法の言葉』である。

『心を整える』は、私自身がサッカー選手の長谷部誠氏のファンであったことから、書店の店頭で紹介されていたのを見て、タイトルに興味を持ち、すぐ読んでみた。読んでいくうちに、共感する点や、自分の生き方にも取り入れていきたいと思うことがたくさんあった。中でも、「整理整頓は心の掃除に通じる」「マイナス発言は自分を後退させる」「偏見を持たず、まず好きになってみる」「勇気をもって進言すべきときもある」「感謝は自分の成長につながる」「笑顔の連鎖を巻き起こす」は、今も心掛けるようにしている。

『子どもが育つ魔法の言葉』は、保護者対象のセミナーで話をすることになり、見つけた本である。私自身、すでに子育てはほぼ終わっていたが、子育ての前に読んでおきたかったと思った本である。本書の詩の中に「愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ」は冒頭に書かれていた詩である。当たり前のことなのに、なぜか新鮮で心惹かれた。他にも「叱りつけてばかりいると、子どもは『自分は悪い子なんだ』と認めてしまう」「広い心で接すれば、キレる子にはならない」「認めてあげれば、子どもは自分が好きになる」「やさしく、思い

やりをもつて育てれば、子どもはやさしい子に育つ」など、子育ての示唆になるような多くの詩が書かれていた。セミナーの最後にも、この詩を朗読すると、保護者たちは共感したようにならずに聴き入っていた。

最近、私が関心をもち始めたのが絵本である。子どもたちへの読み聞かせや、ストーリーテリングをしている知人から、絵本のすばらしさを聞き、実際に読んでみることにした。書店に行くとみると、子どもだけでなく、おとなも楽しめる絵本がたくさん並んでいる。今も、私がとても大事にしている絵本は、いもとうこの『かぜのどんわ』である。東日本大震災の後にかかれたもので、実際に岩手県大槌町の個人の自宅の庭に置かれていた「風の電話ボックス」をもとにつくられた絵本のこと。絵本の中の文字はたくさんではないが、たくさんの感動をもらった絵本である。友人や知人に読んでほしくて、この絵本を、何人かにプレゼントしたことがある。

絵本には、読んでいる人、聴いている人、それぞれの空想の世界観が広がるような魅力がある。これからも、絵本でより想像力を働かせ、自分だけの楽しい空想の世界を楽しんでいきたいと思う。

これまでの私自身の読書人生を振り返ってみると、本によって楽しませてもらう、勇気づけられたり、もちろん専門的な知識も得ることができたりと、改めて本は身近な存在であることを実感した。これまで、読んできた本たちに感謝、感謝。

## 図書館フェア [7/5~7/13]

今年の図書館フェアでは、新着本展示・テーマ展示・七夕飾りなどを行いました。最終日には抽選会でも多くの生徒・学生が参加し、とても盛り上がりました。



### <テーマ展示①>「第5回 WBC侍ジャパン優勝」

今年3月、日本中が熱狂したWBC日本優勝について取り上げました。日本チームのユニフォームの色をテーマカラーに、WBCについて書かれた記事やトーナメント表、栗山監督の著書などを展示しました。



選手たちの写真を見ていると、あの時興奮したときの感動が蘇ってきました。

### <テーマ展示②>「金子みすゞ生誕120年」

童謡詩人「金子みすゞ」の生誕120年にちなんで、彼女の残した詩や作品を紹介しました。26年という短い生涯で残した作品は、どれも優しく慈愛に満ちています。そんな作風に合わせた、自然であたたかな雰囲気での展示にしました。フェア中は金子みすゞの詩の一部を載せた特別版の\*返却スリップを渡しました。



\*返却スリップ…本の貸出の時に渡す返却日が書かれたしおり

### <テーマ展示③>「地震を考える～関東大震災から100年～」

関東大震災から100年ということで、地震について考えてもらう展示を行いました。南海トラフ巨大地震の怖さを伝えたり、実際の防災グッズを展示し手に取って見てもらったりしました。また、より防災意識を高めてもらうために、図書館入口で地震に関するDVDも上映しました。



## 「場」

鷲野 嘉映 (短期大学 教授)

「先生、地震があったら本棚に押し潰されますよ。気を付けてください。私が一番危ないのですが。」前所属大学において、個人研究室に遊びに来た学生の誰からも言われた言葉です。(不適切、かつ気分を害される方がおられる言葉でありますこと、ご容赦ください。)研究室は、一面の壁全てに本棚を設置しており、天井まで本がずらりと並んでいました。その量でも足りないため、壁に対して垂直にさらに4本の本棚を設置してました。正確な数は定かではありませんが、蔵書は二千冊を超えていたのではないかと推察します。部屋のイメージとしては、皆さんがドラマやニュース等で見る大学の教授室をさらにひびくしたものです。研究室の半分以上が本に占領され、私は窓際の空いたスペースに机を置いて仕事をしていました。そんな雑多な研究室でしたが、毎日のように何人かの学生が私の研究室に来ては、私の机に対峙した長机で本棚の本を読んだり、話しかけたりしては時間を過ごしていました。居住空間は非常に狭いスペースでしたが、本に囲まれたその研究室は、学生が不思議に集う空間でした。私に人

としての魅力はありませんので、大学の研究室らしい溢れんばかりの本に囲まれた学際的な空間が、学生を引き付けていたのかも知れません。思えば幼少の頃より本に囲まれた生活でした。両親が本好きなこともあつたか、実家のいくつもの部屋には本棚があり、姉弟で過す部屋の一面も後の大学の研究室同様本棚がずらりと並んでいました。本棚には、『世界少年少女文学全集』『日本文学全集』『世界文学全集』『子ども百科事典』等々が並んでおり、文字が読めるようになってからは、簡単な内容の本から順に難解な内容の本まで、時間を見つけては繰り返しそれらの本を開いていました。何もわからず、小学生低学年の頃に、井原西鶴の『好色一代男』を読んだ記憶があります。

小中学校でも、毎年必ず図書委員を希望し、お昼休みや放課後には図書館に入り浸っていました。卒業までには、図書館の本を分野問わずにほぼ読破していました。自分にとって図書館は一番の遊びの場であったと言えます。

なかつたのは、学校の勉強を全くせず、に推理小説ばかり読んでいたからだ！と今でも責められています。曲がりなりにも大学院を修了することができたのは、小中学生時代の分野問わぬ乱読のお陰である自分では信じています。

このように、図書館、本に囲まれた環境というのは、個人を成長させ、人に安らぎを与え、人が集うための「場」であると考えます。しかしながら、図書館のあるべき姿は時代とともに変化せざるを得ないのかもしれない。私においても、前大学を辞するとき、ほぼ全ての本を処分しました。現在、デジタル技術の進歩により、電子書籍、オンラインデータベース、学術論文など、膨大な情報がオンラインで利用可能となりました。私の専門分野の特性もあり、私自身は正書を読むよりはウェブを用いて最新の研究や健康情報を得ることが多くなり、本も電子書籍を購入することが殆どとなりました。しかしながら、「情報提供の場」「学びの場」「人間形成の場」「交流の場」として、図書館の存在はこれからも重要であると考えます。今更ではあります、周りを本に囲まれていた環境を懐かしく思うこの頃です。これからも図書館に足しげく通い、新たな「自分の場」を見つけていきたいと思つています。